生, 死, 言葉, 身体のイメージ

——青年を対象として——

京都大学 李 敏 子

Images of life, death, word and body in adolescence

Min-Ja Lee (*Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Kyoto University, Sakyo-ku, Kyoto 606*)

Using single-adjective semantic differential scales, images of life, death, word and body were examined in 176 male and 208 female university students. The results were as follows: (1) Factor analysis of scales were carried out concept by concept. Two factors, the positive image and the negative image, were extracted for all concepts. (2) The concepts of life and death showed a concept-scale interaction, whereas the factorial structures of the concepts of word and body were very similar. (3) Factor scores indicated that females have a more positive image of life than males, and that males have a more negative image of death and a more positive image of body than females. There was no sex difference in the image of word. (4) The positions of concepts in semantic space indicated that self-image and life image are very similar in females.

Key words: images, single-adjective semantic differential scales, factorial structures of semantic space, sex differences, adolescence.

イメージは“個々のひとが、特定の対象や事態あるいは概念に関して抱いている漠然とした過去・現在にわたる経験や印象の全体”(心理学実験指導研究会, 1979, p. 181)として定義される。イメージの測定には、SD法(semantic differential technique)が広く用いられている。SD法は、Osgood (1952)により提案されたもので、情緒的意味(affective meaning)の測定法である。Osgood, Suci, & Tannenbaum (1957)は、個々人は、反対の意味をもつ形容詞を両極にもつ連続体によって記号に意味を賦与するという仮定に基づき、両極性の形容詞尺度を構成した。そして、概念のもつ意味空間(semantic space)は、評価、力量、活動という3つの普遍的な両極性の因子から成ると考えた。これに対してGreen & Goldfried (1965)は、形容詞対の双方をそれぞれ単極性の尺度で評定する単独形容詞SD(single-adjective semantic differential)法を用いて概念を評定させ、尺度の因子分析の結果から、Osgood et al. (1957)の主張する意味空間の普遍性と両極性に対して疑問を投げかけている。意味空間の普遍性については、因子分析の結果、各概念により、尺度の因子構造がかなり異なることから、どの概念にも普遍的な意味空間があるという根拠は見出し難いとしている。意味空間の両極性についても、両極性の因子も見出されるが、意味空間は主としてさまざまな単極性の因子から構成されているようだと述べている。そして両極性の因子が存在する程度は概念

により異なるとし、それ故、意味空間が両極性であるかどうかは概念に依存するとしている。

意味空間の普遍性については、Osgood et al. (1957)もすでに、判断の対象が変われば尺度の因子の意味が変わり、抽出された因子の相対的重要性の順位が変わるという事実を指摘している。田中(1967)によれば、意味空間の構造は、意味空間を構成する主要因子の分散によって表わされる各因子の相対的重要性と、主要因子に負荷量の大きい尺度の特徴とによって定義されるのであり、これらの相違は、意味空間の構造の相違を意味する。そして田中(1967)は、Osgoodモデルの内部的一貫性を損なわずに概念による因子構造の相違または因子の相対的重要性の変化を説明するために、概念と尺度のインターアクションという仮説を提出した。Tanaka, Oyama, & Osgood (1969)は、“概念または概念種の特徴的属性は、意味空間内部に尺度の回転をひきおこすことによって、意味判断に選択的影響を及ぼす”(Tanaka et al., 1969, p. 302)と結論している。

このように、概念により尺度の因子の意味が変わることが明らかになってきたので、過去の因子分析の結果に依存して尺度の因子の意味を予測するのではなく、個々の研究に因子分析を行なって各尺度の因子の意味を確認するという事後的アプローチがとられねばならなくなった。そして尺度も、過去に用いられたものを繰り返し用いるのではなく、田中(1967)が述べるように、

概念に潜在するかもしれない固有の意味次元を引き出せるように、周到な工夫の下に選択されねばならないのである。

また、単独形容詞 SD 法には、両極性の尺度上では中点に評定されていたものの内容をより明確にしようという利点がある。Green & Goldfried (1965) によれば、中点に評定される場合には、(a) どちらの形容詞にもあてはまる (b) 概念は尺度上中立 (c) 尺度は概念と全く無関連、という 3つの可能性が考えられるが、単独形容詞 SD 法を用いれば、とりわけ (a) の様相を具体的に明らかにすることが可能であり、これにより一つ概念に対してのもつイメージの両価性を測定することができると思われる。

上述のような研究に方法論的に依拠して、本研究では、単独形容詞 SD 法を用いて、青年がもつ生、死、言葉、身体イメージを測定する。そこで、生、死、言葉、身体という概念を選択し、被験者として青年を選んだ理由について述べたい。

青年期においては、親から自立して、新しい、より成熟した対他関係を築くことが課題となる (Havighurst, 1952)。対他関係を確立する上で、他者とのコミュニケーションの手段である言葉と身体とが、青年にとって重要なものになると思われる。言葉と身体はコミュニケーションの手段として相補的に機能すると思われるが、両者は密接に関連しあっていることが、病理学的な面から指摘されている。例えば、自分の感情を適切に言葉で述べることができないことを最大の特徴とする失感情症 (alexithymia) には失体感症としての側面があること (五味淵, 1983) や、“チックおよびジル・ド・ラ・トゥレット症候群の症状は、言葉と身体両面において現われる” (森谷, 1983, p. 401) ことがあげられる。青年期の課題である性受容 (笠原, 1977) との関連においても、身体は青年にとって重要な位置を占めると言えるだろう。特に、性同一性障害が未婚の女性に多いことから、性同一性を獲得することは女性にとって男性よりも困難であることが指摘されている (西園, 1983)。このような理由から、青年がもつ言葉と身体イメージを測定することには意義があると思われる。また、“対人関係は人間の生活の中核にある” (Russel, Peplau, & Cutrona, 1980, p. 472) ので、言葉と身体イメージと同時に、生と死のイメージも測定することにする。これらのイメージの男女差を明らかにすることが、本研究の目的である。

実 験 I

この実験では、概念ごとに尺度の因子分析を行ない、因子得点の男女比較を行なう。

方 法

被験者 大学生 300 名 (男子 147 名, 女子 153 名)。平均年齢は男子 20.8 歳 ($SD=1.2$), 女子 19.5 歳 ($SD=1.1$) であった。

測定方法 単独形容詞 SD 尺度を用い、作成した形容詞対をばらばらにして、それぞれ独立に 7 段階で評定させた。対の一方の形容詞による評定が、もう一方の形容詞による評定に与える影響を少なくするために、形容詞群を前半と後半に分け、対の一方が前半にくれば、もう一方は必ず後半にくるように配置した。また肯定的な意味をもつ形容詞と否定的な意味をもつ形容詞が前半と後半のどちらか一方に偏ることなく、均一に配分されるようにした。教示は“以下の各ページの上にならべている言葉に対してあなたがもつイメージを、下に並んでいる形容詞によって判定して下さい。一般的なイメージをきいているのではありません。例のように‘明るい’という形容詞が、あなたが上の言葉に対してのもつイメージに‘ややあてはまる’ならば、‘ややあてはまる’の下に縦線に○印をつけて下さい”とした。この評定例を Fig. 1 に示した。Green & Goldfried (1965) の記述を参考にして、以下の 3つの注意を与えた。(a) すべての形容詞について順に判定し、とばさないこと (b) ひとつの形容詞について 2つ以上○印をつけないこと (c) どの形容詞に対しても、ほかの回答に影響されることなく、各々独立に判定すること、の 3つである。イメージという語は、ここでは全く常識的な意味で用いているので、特にイメージという語について説明を加えることはしなかった。余計な先入観を与えないという配慮もあった。

形容詞対の作成 形容詞対作成の基準は以下の通りである。

1. 生と死のイメージ：両者を共通に測定しようと思われる 27 対の形容詞対を作成した。形容詞対の作成に際しては次の 3つの観点をういた。(a) 主体をとりまく環境を形容するもの (例：“あたたかい-冷たい” “包みこ

Fig. 1. Rating format.

Table 1
Factor loadings of scales measuring images of life and death

Scale	Factor				Scale	Factor			
	Life		Death			Life		Death	
	I	II	I	II		I	II	I	II
1. 安心した	-.06	.69	.71	-.23	15. 包みこむような	-.08	.64	.66	-.09
不安な	.48	-.06	-.23	.49	はねつけるような	.37	.01	.01	.60
2. やわらかい	-.12	.41	.58	-.20	16. 幸福な	-.13	.72	.62	-.17
固い	.49	-.10	.01	.52	不幸な	.71	-.06	-.36	.59
3. のんびりした	.03	.58	.56	-.08	17. 親しい	.05	.53	.70	-.12
せかせかした	.46	.04	.16	.51	疎遠な	.56	-.18	-.06	.42
4. なつかしい	.25	.21	.62	-.09	18. 心がはずむ	-.06	.73	.59	.01
おそろしい	.73	-.06	-.42	.60	ゆううつな	.71	.02	-.20	.65
5. 無心の	.13	.21	.30	.04	19. 愛に満ちた	-.05	.59	.72	-.12
邪心のある	.59	-.01	.12	.57	敵意に満ちた	.55	-.10	.09	.70
6. ぬくもりのある	-.07	.68	.74	-.20	20. のびのびした	-.15	.70	.68	-.12
寒々とした	.65	-.14	-.34	.57	ビクビクした	.66	-.02	-.12	.69
7. 心地良い	-.10	.67	.68	-.27	21. 生き生きした	-.24	.68	.66	-.19
心地悪い	.74	-.18	-.23	.68	疲れした	.70	.04	-.01	.62
8. 平静な	.09	.36	.43	-.01	22. 保護された	.21	.39	.60	.04
動揺した	.50	.09	.01	.62	侵害された	.66	-.08	.04	.66
9. 満ち足りた	-.12	.65	.74	-.15	23. 慈悲深い	.22	.39	.43	.14
不満な	.70	-.11	-.03	.62	残酷な	.56	-.00	-.26	.61
10. 近い	-.00	.39	.34	.11	24. あこがれられた	.12	.43	.54	.02
遠い	.52	-.05	-.14	.38	嫌悪された	.60	-.07	-.04	.63
11. 優しい	-.10	.60	.76	-.25	25. 希望に満ちた	-.05	.63	.64	-.09
きびしい	.30	.11	-.14	.53	絶望的な	.64	-.06	-.31	.61
12. ゆったりした	-.13	.66	.68	-.22	26. くつろいだ	.01	.64	.72	-.09
きゅうくつな	.63	-.08	-.03	.65	緊張した	.36	.18	.02	.52
13. たのしい	-.06	.64	.65	-.16	27. あたたかい	-.12	.70	.74	-.26
さびしい	.73	.01	-.30	.63	冷たい	.70	-.12	-.31	.58
14. 充実した	-.08	.64	.64	-.12	Contribution (%)	10.2	9.4	11.9	10.1
むなし	.67	.02	-.27	.63					

むような-はねつけるような”) (b) 主体の感情体験を形容するもの(例: “くつろいだ-緊張した” “満ち足りた-不満な”) (c) 対象に対して主体がもつ関係を形容するもの(例: “あこがれられた-嫌悪された” “親しい-疎遠な”)

2. 言葉と身体のイメージ: 1. とは別に, 言葉と身体のイメージを共通に測定しようと思われる 33 対の形容詞対を作成した.

調査方法 集団テスト法により, 無記名で施行された.

結果の処理方法 Fig.1 のように, “全くあてはまらない” (0 点) — “非常にあてはまる” (6 点) というように得点化した. また, 各概念ごとに, 主因子法, バリマ

ックス回転による尺度の因子分析を行ない, 因子得点を男女別に算出して, 男女の比較を行なった.

結果と考察

因子分析の結果 生と死の概念における尺度の因子分析の結果を Table 1 に, 言葉と身体概念における尺度の因子分析の結果を Table 2 に示した. 全ての概念において, 肯定的イメージと否定的イメージの 2 因子を抽出した. 生, 言葉, 身体概念では, 第 I 因子が否定的イメージ, 第 II 因子が肯定的イメージであったが, 死の概念では, 第 I 因子が肯定的イメージ, 第 II 因子が否定的イメージであった. 生と死の概念は同一尺度を用いて測定したにもかかわらず, 肯定的イメージを表わ

Table 2
Factor loadings of scales measuring images of word and body

Scale	Factor				Scale	Factor			
	Word		Body			Word		Body	
	I	II	I	II		I	II	I	II
1. 自然な	-.09	.52	-.18	.53	18. 安定した	.00	.46	-.19	.61
不自然な	.56	-.03	.59	.03	不安定な	.47	-.09	.54	.07
2. 根のはえた	.21	.33	.34	.40	19. 愛に満ちた	.13	.65	.15	.58
宙に浮く	.53	.02	.46	.13	敵意に満ちた	.62	.19	.62	.05
3. 気にならない	.02	.19	.07	.17	20. 永続的な	.01	.43	.00	.40
こだわりを生む	.59	.08	.60	.14	かりそめの	.47	.02	.49	.10
4. 堅実な	.14	.56	.07	.62	21. 人を束縛しない	-.13	.38	.10	.39
からまわりする	.58	.08	.53	.15	人を束縛する	.57	-.04	.55	.11
5. 心を落ち着かす	.16	.43	.16	.54	22. 役に立つ	-.11	.39	-.18	.60
心を乱す	.64	.03	.60	.18	害のある	.60	-.00	.54	.10
6. 自由自在に扱える	-.07	.44	-.23	.51	23. スムーズな	.01	.57	-.03	.64
思い通りにならない	.45	-.11	.41	-.09	ぎこちない	.62	.00	.64	-.11
7. 慈悲深い	.26	.29	.38	.40	24. 柔軟な	.13	.61	.01	.47
残酷な	.57	.01	.64	.11	硬直した	.44	.07	.49	.02
8. 生き生きした	.05	.66	-.15	.58	25. 好ましい	.06	.66	-.06	.61
死んだような	.51	-.10	.56	-.08	嫌悪すべき	.51	.01	.67	-.05
9. 慣れ親しんだ	.07	.52	.02	.58	26. 首尾一貫した	.04	.45	.03	.51
異和感のある	.58	.11	.70	-.02	矛盾した	.67	-.03	.59	.02
10. 信じられる	-.09	.64	-.01	.69	27. 純粋な	.02	.63	.08	.57
あてにならない	.57	-.15	.65	-.00	不純な	.65	.09	.60	.03
11. 直接の	-.03	.43	.15	.50	28. 喜びを与える	.07	.57	.04	.65
まだるっこしい	.53	.00	.57	.03	苦しみを与える	.67	.08	.60	.05
12. 充実した	-.02	.55	.00	.62	29. なめらかな	.08	.57	.08	.63
むなしい	.65	.00	.68	.03	ぎくしゃくした	.59	.05	.60	-.04
13. 快適な	-.03	.63	-.04	.64	30. 罪のない	-.04	.43	.06	.36
不快な	.66	.16	.57	-.13	罪深い	.68	.10	.63	.10
14. 丸い	.16	.48	.26	.32	31. まとまりのある	.07	.59	.03	.61
とげのある	.62	.23	.70	.06	バラバラな	.53	.10	.61	-.13
15. 親しい	.02	.58	.08	.66	32. 希望に満ちた	.10	.72	.00	.65
疎遠な	.37	-.04	.56	-.03	絶望的な	.56	.25	.67	-.05
16. 真実の	.07	.68	.07	.61	33. 確かな	-.07	.60	.05	.60
いつわりの	.66	.03	.63	.08	不確かな	.52	-.11	.56	-.06
17. 正直な	.03	.65	.08	.53	Contribution (%)	11.3	9.9	12.3	10.3
不正直な	.66	.17	.66	.06					

す因子と否定的イメージを表わす因子の重要性の順位が逆転していることから、概念と尺度のインターアクションのあることが確かめられた。言葉と身体 の 概念は、Table 2 に見られるように、ほぼ同じ因子構造をもつことが明らかになった。問題で述べた言葉と身体 の 密接な関連性は、このような両者の情緒的意味の類似性から説明されるかもしれない。また、全ての概念において、第

I 因子得点と第 II 因子得点との間には有意な相関が見られず (各々, $r=.000$, $r=-.022$, $r=.008$, $r=.004$)、第 I 因子と第 II 因子とが独立であることが確かめられた。もし意味空間が両極的であるならば、対をなす形容詞は同じ因子に正負の符号が逆でほぼ同じ大きさの因子負荷量をもたねばならない (Green & Goldfried, 1965)。しかし、同一の因子に正負の符号が逆でいずれも 0.30 以

Table 3
Factor scores of life image

Sex	Factor 1	Factor 2*
Male	-.057 (1.018)	-.150 (.999)
Female	.055 (.983)	.144 (.983)

Note: Number in parenthesis indicates *SD*.

* $p < .05$

Table 4
Factor scores of death image

Sex	Factor 1	Factor 2*
Male	-.063 (.955)	.114 (.986)
Female	.061 (.995)	-.110 (.941)

Note: Number in parenthesis indicates *SD*.

* $p < .05$

上の大きさの因子負荷量をもった形容詞対は、死の概念の第 I 因子 (肯定的イメージ) における 6 対だけであった。すなわち、なつかしい-おそろしい、ぬくもりのある-寒々とした、たのしい-さびしい、幸福な-不幸な、希望に満ちた-絶望的な、あたたかい-冷たい、の 6 対である。これらの結果から、意味空間は主として単極性の因子から構成されているという Green & Goldfried (1965) の見解が支持されたように思われる。死の概念において両極性の見られた 6 個の形容詞対を除いて、これらの概念のもつ意味空間は全て単極性の因子から成り、相対立すると思われるイメージが、互いに独立な因子によって構成されていることが示されたと言える。従って、青年は、生，死，言葉，身体に対して、肯定的と否定的の両方のイメージを同時にもち、一方のイメージにより他方を否定するのではなく、両者を共存させていると言える。つまり、青年は、対象のもつ両側面を別個に認識できているのである。以上のようなことが単独形容詞 SD 法を用いることにより明らかになったのであるが、ここに、生，死，言葉，身体のように高い両価性を生むと考えられる概念のイメージ測定には、単独形容詞 SD 法が有効であることが示されていると言えよう。

生と死のイメージの男女差 生と死のイメージの男女別の因子得点を Table 3, Table 4 に示した。Table 3 より、生に対しては、肯定的イメージは女子の方が男子より有意に高く、否定的イメージには男女差が見られない。Table 4 より、死に対しては、否定的イメージは男

Table 5
Adjectives showing sex difference in life image

- (a) 男性の方が高得点であったもの
 $p < .01$ 疎遠な
 $p < .05$ はねつけるような、敵意に満ちた、侵害された
- (b) 女性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 満ち足りた、むなしい、愛に満ちた、保護された、さびしい
 $p < .01$ 不安な、ゆううつな、あこがれられた、無心の、きびしい、幸福な、心がはずむ
 $p < .05$ 動揺した、疲れた、充実した
 $p < .10$ たのしい、のびのびした、ぬくもりのある、生き生きした

Table 6
Adjectives showing sex difference in death image

- (a) 男性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 敵意に満ちた
 $p < .01$ きゅうくつな、残酷な、不満な、侵害された
 $p < .05$ せかせかした、邪心のある、ゆううつな、嫌悪された、心地悪い
 $p < .10$ 不幸な、絶望的な
- (b) 女性の方が高得点であったもの
 $p < .01$ 優しい、安心した、平静な、慈悲深い
 $p < .05$ 不安な、心地良い、包みこむような、保護された、あたたかい、無心の
 $p < .10$ なつかしい、愛に満ちた、あこがれられた、ゆったりした、幸福な

子の方が女子より有意に高く、肯定的イメージには男女差が見られない。このことから、女子の方が生に対してより肯定的であり、男子の方が死に対してより否定的であると言える。男女差をより具体的に見るために、生と死のイメージにおいて男女で有意な得点差の見られた形容詞を Table 5, Table 6 に示した。Table 5 より、男子にとっての生は女子にとってのそれより“疎遠な”“はねつけるような”“敵意に満ちた”“侵害された”ものである。一方、女子にとっての生は男子にとってのそれより“きびしい”が、“愛に満ちた”“保護された”“ぬくもりのある”ものであり、生において“満ち足りた”“幸福な”“心がはずむ”“充実した”“たのしい”“のびのびした”“生き生きした”感情と“ゆううつな”“動揺した”“疲れた”感情の両方が男子よりも強く経験されている。Table 6 より、男子にとっての死は女子にとってのそれより“敵意に満ちた”“侵害され

Table 7
Factor scores of word image

Sex	Factor 1	Factor 2
Male	-.028 (.981)	.070 (.927)
Female	.027 (.968)	-.067 (1.006)

Note: Number in parenthesis indicates *SD*.

Table 8
Factor scores of body image

Sex	Factor 1	Factor 2*
Male	-.046 (1.011)	.126 (.958)
Female	.045 (.942)	-.121 (.970)

Note: Number in parenthesis indicates *SD*.

* $p < .05$

た”ものであり、“きゅうくつな”“不満な”“せかせかした”“邪心のある”ゆううつな”“心地悪い”“不幸な”“絶望的な”ものとして感じられている。男子にとっての死は女子にとってのそれより“残酷な”ものであり“嫌悪された”ものである。それに対して、女子にとっての死は男子にとってのそれより“不安な”ものではあるが、“優しい”“慈悲深い”“包みこむような”“あたたかい”“愛に満ちた”ものであり、“なつかしい”“あこがれられた”ものである。そして女子は死を男子より“安心した”“平静な”“心地良い”“保護された”“無心の”“ゆったりした”“幸福な”ものと感じている。このように、男子は女子より死を嫌悪し、女子は男子より死にあこがれる。生と死の両方を、男子は女子より“敵意に満ちた”“侵害された”ものと感じており、一方、女子は男子より“愛に満ちた”“保護された”“無心の”“幸福な”“あこがれられた”“不安な”ものと感じている。また、“ゆううつな”という形容詞は、生のイメージにおいては女子の方が高得点であったが、死のイメージにおいては男子の方が高得点であった。以上の結果から、生に対しても死に対しても、男子は悲観的、一面的なイメージを抱きやすく、女子は、より楽観的、両面的なイメージを抱きやすいと言えるだろう。

言葉と身体イメージの男女差 言葉と身体イメージの男女別の因子得点を Table 7, Table 8 に示した。Table 7 より、言葉に対しては、肯定的イメージ、否定的イメージともに、男女差が見られない。Table 8 より、身体に対しては、肯定的イメージは男子の方が女子

Table 9
Adjectives showing sex difference in word image

- (a) 男性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 気にならない, 自然な
 $p < .01$ 人を束縛しない, 疎遠な
 $p < .05$ 死んだような, 害のある, 確かな, 異和感のある, 嫌悪すべき
 $p < .10$ 不快な, 好ましい, 罪のない
- (b) 女性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 思い通りにならない
 $p < .05$ 慣れ親しんだ, かりそめの, 心を乱す, 喜びを与える, 不安定な
 $p < .10$ あてにならない, こだわりを生む, むなし

Table 10
Adjectives showing sex difference in body image

- (a) 男性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 自由自在に扱える, 正直な
 $p < .05$ スムーズな, 信じられる, 堅実な, 喜びを与える, 快適な, 疎遠な, 希望に満ちた, 役に立つ
 $p < .10$ 親しい, まとまりのある, 不正直な, 柔軟な
- (b) 女性の方が高得点であったもの
 $p < .001$ 思い通りにならない, 丸い
 $p < .05$ かりそめの, 不安定な, 人を束縛する
 $p < .10$ 不快な

より有意に高く、否定的イメージには男女差が見られない。男子の方が女子より身体に対して肯定的イメージをもつことが示されたが、先に述べた女子の性受容の困難は、身体への肯定的イメージのもち難さと関係しているのだろう。男女差をより具体的に見るために、言葉と身体イメージにおいて男女で有意な得点差の見られた形容詞を Table 9, Table 10 に示した。Table 9 より、女子にとっての言葉は男子にとってのそれより“慣れ親しんだ”ものでありながら、“思い通りにならない”。男子と比べて、女子にとって言葉は“かりそめの”“不安定な”“あてにならない”“むなし”ものであるのに、“こだわりを生む”。男子と比べて、女子にとって言葉は“心を乱す”が“喜びを与える”ものである。女子が言葉にこだわるのに対して、男子にとって言葉は、より“気にならない”ものである。女子にとって“慣れ親しんだ”言葉が、男子には、より“疎遠な”“異和感のある”ものとして感じられている。女子にとって“不安定な”言葉が、男子には、より“確かな”

ものとして感じられている。Table 10 より, 女子にとっての身体は男子にとってのそれより, 言葉と同様に“思い通りにならない”ものである。そして身体は, 言葉と同様に“かりそめの”“不安定な”ものとして感じられている。それ故, 身体は女子にとって, より“不快な”ものである。一方男子にとっての身体は女子にとってのそれより, 言葉と同様に“疎遠な”ものである。男子は女子より身体を“自由自在に扱える”“スムーズな”“信じられる”“堅実な”“快適な”“役に立つ”“柔軟な”ものとして感じている。このように言葉と身体の両方を, 男子は女子より“疎遠な”ものと感じ, 女子は男子より“思い通りにならない”“かりそめの”“不安定な”ものと感じている。このことから, 言葉と身体の両方を, 男子は安定的に支配するが, 女子はうまく支配できず, 不安定さを感じていると言えるだろう。

実験 II

この実験では, 意味空間内で, 生, 死, 言葉, 身体という概念が, 自己概念とどのような位置関係にあるのかを調べ, その男女差を検討する。

方 法

被験者 実験 I とは異なる大学生 84 名 (男子 29 名, 女子 55 名)。平均年齢は男子 19.7 歳 ($SD=1.4$), 女子 18.9 歳 ($SD=0.8$) であった。

測定方法 実験 I と同様の方法を用いた。ただし, 自己イメージを測定するために, Osgood et al. (1957) にない, 概念として私 (ME) を加え, 生, 死, 私を同一の尺度で, 言葉, 身体, 私を同一の尺度で測定した。

調査方法 集団テスト法により, 無記名で施行された。

結果の処理方法 実験 I と同様の手続きで得点化した。男女別に, 因子数 2 を指定して主因子法, バリマックス回転による因子分析を行なった。同一尺度を用いた概念を同一平面上に位置づけるために, 3 (概念数) × (男女別の被験者数) × (尺度数) 個のデータを用いて, 因子分析を行なった。

結果と考察

生, 死, 私の位置関係 男女ともに, 第 I 因子は肯定的イメージ, 第 II 因子は否定的イメージであった。因子得点を算出して, 第 I 因子得点を横軸, 第 II 因子得点を縦軸とする座標平面上に, 3 つの概念を位置づけた (Fig. 2)。Fig. 2 より, 女子では, 死, 私, 生の順に否定的イメージが減少すると同時に肯定的イメージが増加している。死に対しては, 否定的イメージが相対的に優勢であり, 私と生に対しては, 肯定的イメージが相対的に

優勢である。しかも, 生と私とは, きわめて近い位置にある。このことから, 女子においては, 自己イメージと生のイメージとが類似していると言える。女子は, 自己を肯定するのとはほぼ同じ程度に生を肯定し, 自己を否定するのとはほぼ同じ程度に生を否定するのであろう。一方, 男子では, 死, 私, 生の順に否定的イメージが減少するが, 死, 生, 私の順に肯定的イメージが増加している。死に対しては否定的イメージが相対的に優勢であり, 生に対しては肯定的イメージが相対的に優勢であるのは, 女子と同様であるが, 生と私との距離が女子に比べて遠いと思われる。この距離の遠さは, 自己イメージが生のイメージよりも否定的であることに主として起因すると思われる。つまり男子は, 自己を否定するほどには生を否定していないのである。女子では, 自己イメージと生のイメージが直結しやすいが, 男子では, 自己イメージと生のイメージとの間に隔たりがあり, 自己イメージの方がむしろ否定的のが特徴である。

言葉, 身体, 私の位置関係 男女ともに, 第 I 因子は否定的イメージ, 第 II 因子は肯定的イメージであった。3 つの概念の位置関係を Fig. 3 に示した。Fig. 3 より, 3 つの概念の位置関係は男女できわめて似ていることがわかる。男女ともに, 身体, 私, 言葉の順に, 肯定的イメージ, 否定的イメージの両方が増加している。身体は自己の一部であり, 身体への意識は自己意識ほどに鮮明ではなく, 健康な場合には身体は殆ど意識されない

Fig. 2. Positions of LIFE, DEATH and ME in two-dimensional system.

こと、一方、言葉は自己を認識する際にも他者とのコミュニケーションの際にも、青年期においては重要な位置を占めること、そのために身体、私、言葉の順に青年が感情的に捕われる度合いが強くなること、この理由として考えられる。

要 約

生、死、言葉、身体のイメージの男女差を要約すると以下になる。

1. 女子は男子よりも、生を肯定し死を否定しない。女子は生に対しても死に対しても男子より楽観的な見方をしている。女子においては自己イメージと生のイメージとが類似しており、自己への感じ方が生への感じ方を規定していると考えられる。一方、男子では自己イメージと生のイメージとの間に女子よりも隔たりがあり、生よりも自己に対して否定的である。

Fig. 3. Positions of WORD, BODY and ME in two-dimensional system.

2. 言葉のイメージには男女差が見られないが、身体に対しては男子の方が肯定的である。言葉と身体の両方を男子は安定的に支配するが、女子はうまく支配できず不安定さを感じている。男女ともに、身体、自己、言葉の順に、それに対する両面感情を増す。

引用文献

- 五味淵隆志 1983 精神の病いにおける心と体——分裂病を中心にして——飯田 真・笠原 嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井 久夫(編) 精神の科学 4 岩波書店 Pp. 309-356.
- Green, R. F., & Goldfried, M. R. 1965 On the bipolarity of the semantic space. *Psychological Monographs*, No. 599. (Vol. 79, No. 6)
- Havighurst, R. J. 1952 *Developmental tasks and education*. 2nd ed. New York: Longman, Green and Co.
- 笠原 嘉 1977 青年期 中央公論社
- 森谷寛之 1983 表現としての言葉と身体の病理 飯田 真・笠原 嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井 久夫(編) 精神の科学 4 岩波書店 Pp. 381-407.
- 西園昌久 1983 死との戯れ——手首自傷症候群を中心に——飯田 真・笠原 嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井 久夫(編) 精神の科学 10 岩波書店 Pp. 195-227.
- Osgood, C. E. 1952 The nature and measurement of meaning. *Psychological Bulletin*, 49, 197-237.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana: University of Illinois Press.
- Russel, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- 心理学実験指導研究会 1979 実験とテスト——心理学の基礎——解説編(自費出版)
- 田中靖政 1967 記号行動論——意味の科学——情報科学講座 C・12・3 共立出版
- Tanaka, Y., Oyama, T., & Osgood, C. E. 1969 A cross-cultural and cross-concept study of the generality of semantic space. In J. G. Snider & C. E. Osgood (Eds.), *Semantic differential technique*. Chicago: Aldine Publishing Company. Pp. 289-302.

——1988. 6. 29. 受稿, 1989. 11. 18. 受理——